剣道あまくさ

第4号
発行所
〒863-0033 天草市東町3
天草市総合武道館
天草剣道連盟

礼に始まり、礼に終わる剣道

天草剣道連盟会長　花里　昌直

剣道では礼儀や作法を重んじ、礼に始まり礼に終わると言われ、先生、先輩に対してばかりでなく、同輩や後輩に対しても不作法な態度は慎まなければなりませんし、家に在っては家族に対し、地域の人々に対しても同じであります。

剣道の講習会を受講したとき、講師の先生より、礼とは恭敬、感謝、思いやりの心ですと教えられました。私は大会毎に少年少女の剣士に、家庭での「おはようございます」の挨拶と食前・食後の感謝の言葉の励行をお願いしていますが、朝の挨拶は参加者の半数以下の状態です。家族の会話が少なくなっている時にこそ、挨拶は心の対話であり、けじめでもあります。指導者の先生方には、道場の作法のみならず、必ず家庭での挨拶にまで言及して指導をお願いします。平成二十四年度より剣道、柔道等が中学校の科目に登場するのは、乱れた道徳、礼儀作法の回復に眼目があると思われます。

学生暴動が学園や街頭に荒れ狂い、ついに全国各地の中学校にまで校内暴力が発生した日本の姿を憂い、昭和六十二年、今こそ歩まねばならない道しるべとして全日本剣道道場連盟（会長・小沢丘）では、次代を担う青少年へという小冊子を発行し、熊本藩士元田永孚が編集した幼学綱要をわかり易く説明しています。その二十の徳目の第一が親の恩に感謝する心（孝行）であり、第十に礼儀を正しく（礼譲）する心を教えています。

天地の間、父母のなきの人無し。・・・で始まり、命の尊さ、恩愛の深さを説いています。今朝の新聞にも、子供が家族を撲殺し、母親が幼児を虐待死させた事件が載っていました。今、私達に求められているのは、剣道の特性を通じて、礼節を尊び、心豊かな青少年の指導育成と普及、剣理の錬磨による人間形成と考えます。

会員諸氏の更なる熱意とご協力をお願いいたします。

稽古の在り方　その三

このシリーズは古来伝えられる、剣道の稽古の望むべき方向や教えを紹介・解説し、現在の私達の修行・指導に活かそうというものである。前回までは「百錬自得」、「懸かる稽古をせよ」、「懸待一致」、「稽古は願うもの」、「虚実を知る」を紹介した。私たちの剣道修行の中で今まで得た経験と知識を振り返り、自分たちの理解した範囲の言葉で綴ったものである。従ってひょっとしたら思い違いや解釈の間違いなどがあるかもしれない。しかし各自の長い修練からでたものである。小さな心得違いはあるかもしれないが、大本においては間違いないと信じる。よろしく参考にして頂ければこれに勝る幸せはない。

観見二つの目

簡単に言えば「観」は形に表れない相手の心を見ること、「見」はまさしく形に表れた相手の姿と動きを見ることと言えようか。たとえばこんな経験はないだろうか。錬度の低い下位の方や、まだ剣歴の浅い子供や学生剣士と立ち合うと、相手の動きと共に心の動きまでよく見える。従って我が方は思うような立ち合いを展開できる。一方、錬度の高い上位の方と立ち合うと、まず体の動きはないに等しく泰然自若と構えている。ではどのような心境にあるのか、我の攻めをどう感じているのか、あるいはどのような攻めと技を念じているのか、といわゆる観の目で相手の心の中を我が心の鏡に映そうとするのだが、いかんせん相手の方が修行が上。我が曇った心の鏡には何も映らない。宮本武蔵も『五輪の書』「水之巻」で「観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専也」と言い、外見（見の目付）にばかりとらわれると相手に騙されてしまうので、相手の心をみる（観の目付）ことこそ大切だといっています（『武道伝書を読む』日本武道館発行）。また、武蔵より時代が下って明治・大正・昭和の三代にわたって我が国の剣道界に大きな足跡を残した高野佐三郎（一八六二年～一九五〇年、享年八九）という剣道家について書いた『高野佐三郎剣道遺稿集』（スキージャーナル社、堂本昭彦編著）に、「敵の太刀を知りていささかも敵の太刀を見ず」とか「目に見ずして心に見よ」、さらに「眼にて視るときは、視る所に執して迷いを起こすが、心で視る時は迷わされることはない。」と古人の教えを紹介して観の目の大切さを説いている。大いに学ぶところがある。ひるがえって私たちの日常の稽古に照らしてみれば、「打とう、当てよう」、「打たれたくない、負けたくない」、と相手の姿形に惑い、我が心も千々に乱れるような心境の稽古ではとても剣道を通じた「人間形成の道」という究極の目的に達することはできないだろう。心を尽くして攻め合い、錬り合う。打突の機会を体と心で感じたなら姿勢正しく捨てて打つ。結果がどうあろうと、そこにレベルの高い感動の一本が生まれ、双方共大いに学ぶ所の多い稽古になるはずだ。日本の伝統文化である剣道は私たちにそういう所を要求しているに違いない。共に錬磨ありたい。

敵に従うの勝ち

この言葉を初めて見たときは、その意味がよく解らず「敵の言うままになってどうして勝てるのか？」と逆に疑問に思ったぐらいだ。最近は何となく解るようにはなった。つまり攻め合って無理・無駄・無法の打突を避け、お相手の攻め、技を押さえ込まず、そのまま迎える、つまり敵に従う。しかし、その起こり・懸かり口、技の尽き、居付き、構えの隙、打ち間の隙などのいわゆる打突の好機はしっかり捉えて打つ。大体このように解釈している。ただしそれが可能なためには、お相手を上回る気迫と攻めが必要であることは論を待つまい。日頃の稽古でも、攻めあぐねて痺れを切らし、あるいは慢心から、謂わば自分勝手な技を出しても、それは下位のお相手と言えども通じず、時には逆に討ち取られ、反省することはよくある。十分に攻め合い、「合気」の状態になり、お相手の攻めと技を認め・尊重しつつ、逆らわないがしかし打突の機会は許さない。このようなことではなかろうか。先に